

《書評・映画評》

## 映画『コクリコ坂から』にみる高校生の政治的活動

古 仲 素 子

本稿では、映画『コクリコ坂から』（企画・脚本 宮崎駿 監督 宮崎吾郎 スタジオ・ジブリ2011年）のストーリー上に見られる、高校生による政治的活動に焦点をあてる。まず、戦後教育の脱政治化にかんする歴史を概観したのち、映画のいくつかの場面を取り上げながら、現代の学校における生徒たちの政治的活動の可能性について、若干の示唆を試みる。

### 1. 戦後教育の脱政治化という視点

近年、戦後教育史を再検討する立場から、戦後日本のなかで政治教育が排除されてきたという点が幾人かの論者によって強調されている<sup>1)</sup>。戦後、1947年に出された旧教育基本法第八条（現・第十四条）「政治教育」の第一項では、「良識ある公民として必要な政治的教養は、教育上尊重されなければならない」とされ、そこでは主権者としての国民の政治的教養の尊重が定められていた。しかし、その後の1940年代末から1950年代は、義務教育段階における政治教育をめぐる、文部省と日教組の間に多くの対立が見られた時期であった<sup>2)</sup>。中でも、1954年の「教育二法」の制定は、義務教育段階における教員の脱政治化に多大な影響を与えたと言える<sup>3)</sup>。

ただし、そのような動きの一方で、義務教育を終えた若者たちによる政治的活動はその後にも活発に行われていた。1960年代に多くの学校で起きた学園紛争はそのことを象徴している。しかし、1969年10月に文部省初等中等教育局長通知「高校における政治的教養と政治的活動について」が出されたことで、高校生がそのような活動を行うことに対して、制限、抑制が加えられるようになる。同通達は冒頭で、「大学紛争の影響等もあって、最近、一部の高等学校生徒の間に、違法または暴力的な政治的活動に参加したり、授業妨害や学校封鎖などを行ったりする事例が発生している」<sup>4)</sup>として当時激化していた学園紛争に言及し、高校生の政治的活動は、学校の政治

的中立性を定めた旧教育基本法第八条第二項に反するとして、活動そのものを禁止してしまった<sup>5)</sup>。すなわち、1960年代の大学紛争および高校紛争は、高校教育を脱政治化させようとする上からの動きを、押し進める要因にもなったのである。

近年は、そのような大学紛争および高校紛争に対する関心も高まっており<sup>6)</sup>、その中で、1960年代から1970年頃にかけての全国の高校紛争について、豊富な史料と活動家たちへのインタビューをもとに解明した下村哲夫は、以下のように述べている。

「政治活動の禁止」は実にこわいフレーズである。「活動」できない以上、「政治」を考えることをやめてしまう。政治に興味を持たなくなる。こうなると、社会に対して思考停止状態になりかねない。社会に関心を持たせない、もっと言えば、高校生が批判的なものの見方を身につけることを妨げる、そうなりはしないか<sup>7)</sup>

もちろん、政治的活動の禁止が、子どもたちが政治に興味を持たなくなることに直結するかどうかは議論の余地があるだろう。しかし、広田が「高校生のコドモ化」<sup>8)</sup>として指摘しているような、現代の高校生の政治的無関心の状況を考えた際に、高校生の脱政治化にとって60年代と70年代の間は重要な転換点であったと言える。そのような視点から、1960年代の学生・生徒の政治的活動を歴史的に検討していこうという姿勢は重要であろう。ただし、現代の学校における学生や生徒による政治的活動を考える際は、学校の政治的中立性に配慮した慎重な議論が必要である。そこには、学校の政治的中立性を担保しつつ、どのような活動が学校内外で許容されるのかという、難しい問いが存在する。

以上の点を考えるために、本稿では2011年に公開された映画『コクリコ坂から』に着目した<sup>9)</sup>。この作品は1963年を舞台としながら、後述するように現代

の視点から理想化された部分を多分に含みこんでいるが、だからこそ現代の学校における政治的活動を考える際の様々なヒントを提示してくれているように思われる。映画全体の批評は筆者の手には余るところであるため、映画の中の生徒たちの活動の場面にある程度絞った形で、現代の学校における生徒たちの政治的活動を考える際の手掛かりを探っていききたい。

## 2. 物語のあらすじとカルチェラタン存続のための政治的活動

映画『コクリコ坂から』は、高度経済成長期である1963年の横浜を舞台に、港の見える丘にある下宿屋・コクリコ荘に住む高校二年生・松崎海（ニックネームは「メル」<sup>10)</sup>と、海と同じ高校に通う三年生、風間俊の恋を描いた物語である。物語は、主人公の松崎海が信号旗を揚げ、タグボートに乗った風間俊が応答の旗を揚げる（この時点では、海はそれに気づいていない）場面から始まる。「U・W」の信号旗の意味は、「航海の無事を祈る」。海は朝鮮戦争で父親を亡くしており、その父を想って毎朝旗を掲げているという設定だ。

海や俊が通う高校、私立港南学園には、通称「カルチェラタン」と呼ばれる文化部部室の建物があり、新聞部、天文部、哲学研究会などの様々な部活が活動を行っていた。しかし、校長をはじめとする学校側は、古くなったカルチェラタンを取り壊し、その跡地に新しくクラブハウスを建設しようとする。このような学校側の動きに対して、カルチェラタンで活動する生徒たちが様々な政治的活動で対抗する姿が映画の随所で描かれ、それらの活動が物語を動かす重要な部分を構成している。

例えば、冒頭の朝の場面が続く、海が登校した後のシーン。「おはよう」と挨拶する海に対し、友人が「見て、これメルのことじゃない？」と一枚の新聞を差し出す。この「週刊カルチェラタン」は新聞部が発行したものであり、その左下の欄に海のことを表した詩が掲載されていたのである（のちに、新聞部部長の俊が書いたものであると分かる）。新聞の見出しを見ると、「取り壊し絶対反対 伝統のカルチェラタンを守れ!!」「学園側は議論を拒否」「明日、全学討論会」など、カルチェラタンを守るための運動についての記事がメインとなっている。その後のシー

ンを見ても、「週刊カルチェラタン」は、カルチェラタンを守ろうとする活動の経過を生徒たちに伝えるメディアとしての役割を果たしている<sup>11)</sup>。

また、上記の後の学校での昼食のシーンでは、海と俊との出会いの場面が描かれるが、そこでも、生徒会長の水沼の合図によって、カルチェラタンの生徒たちが「取り壊し、絶対反対!!」「カルチェラタンの火を消すな」「文化の砦を守りぬけ」などの垂れ幕を出し、俊がカルチェラタンの屋根から飛び降りる、という流れになっている。

そして、カルチェラタンの建替えをめぐるの、生徒たちによる放課後の集会の場面は非常に印象的である。その議論の様子を以下で見てみよう。

壇上の発言者「アンケートを採った結果、建替え賛成派は711名。これは80%の生徒が建替え案を支持していることを表しています。学校側の計画を受け入れるべきだと思います！」

[俊が長椅子の上に立ち上がり、大笑いする]

俊「君たちは保守党のオヤジ共のようだ!!学生なら堂々と自己の真情をのべよ!!」

発言者「ルールを守れ!発言中だぞ!」

建替え反対派の生徒「中身の無いヒョータンが数を頼むな!!千成ヒョータンども!!」

建替え賛成派の生徒「侮辱するのか!カルチェの変人!」「私物化して偉そうに言うな」「貴様らこそそうらなりヒョータンだろ!!」「あんなゴミのために何の意味がある!」

建替え反対派の生徒「数で押しきろうなんぞは多数派の圧政だ!」「時勢ばかり気にするご都合主義者!!」「文化を尊重せずに何が発展だ!!」「運動バカ!!」<sup>12)</sup>

( [ ] 内は筆者による補足、以下同様)

アンケートの結果から、多数決によりカルチェラタンは建替えを行うべきだとする推進派（運動部の生徒が中心か）に対して、俊をはじめとする反対派（主にカルチェラタンで活動する生徒たち）は「学生なら堂々と自己の信条を述べよ!」「数で押しきろうなんぞは多数派の圧政だ!」と対抗する。その後、議論はさらに激しくなり、両者のもみ合いにまで発展するが、教師が見回りに来たときと生徒のひとりが合図すると、議論を中絶し、それまで争っていた生徒たちが全員で合唱（『白い花の咲く頃』）を行う場面

へとつながる<sup>13)</sup>。

ここでは、生徒たちが互いの意見を主張しつつも、ときには敵味方を超えて教師による規制に上手く対応している姿が描かれている。以上で見えてきたような生徒たちの政治的活動は、カルチェラタンの建替えという学校内の問題に対する活動であり、そこには、1960年代に問題となったような党派性は見られない。

### 3. 「古いもの」をいかに守っていくのか —現代の視点から

映画では、以上のようなカルチェラタン存続をめぐる政治的活動がストーリー上重要な位置を占めているが、実は、これは原作にはない設定であった。この映画の原作は、1980年に『なかよし』（講談社）に連載された、佐山哲郎原作・高橋千鶴作画の漫画『コクリコ坂から』である。原作の時代設定は1970年代であり、ここでも服装自由化をめぐる生徒たちの政治的活動は描かれているものの、その活動は賭け麻雀で使い込んだ生徒会費の穴埋めのため、学校新聞の売り上げ上昇を目論む俊と水沼によって画策されたものであった<sup>14)</sup>。

映画の脚本を担当した宮崎駿は、「[原作は]明らかに70年の経験を引きずる原作者（男性である）の存在を感じさせ、学園紛争と大衆蔑視が敷き込まれている<sup>15)</sup>と述べており、映画化にあたってその設定を大胆に変更した。すなわち、舞台を東京オリンピックの前年である1963年に設定し、賭け麻雀などの設定をなくして、カルチェラタンという全く新しい要素を取り入れたのである。

このカルチェラタンは、映画において非常に魅力的な存在として登場する。海と妹の空がカルチェラタンに初めて足を踏み入れる場面では、「今日の黒点はひときわ見事だぞ！おまけに列状に並んでいる。太陽の磁場を感じるな」（天文部）「若き哲学学徒よ待っていた…（中略）…まゝ遠慮するな。実存主義について語ろうかなあ。それともニーチェかな」（哲学研究会）「お!! 感度があったぞ!! This is high school student from Japan!」（アマチュア無線同好会）など、そこで活動する男子生徒たちの姿が非常にコミカルに描かれており、戦前の旧制中学校の文化を彷彿とさせる。

また、前述した集会の場面では、壇上の発言者（建

替え推進派）が喧噪の中で次のような弁論を行なっている。

「もはや戦後ではない」と言われてから10年近くの歳月が過ぎたのです。東京オリンピックを来年にひかえわが国は大きく生まれ変わろうとしています！古いものはどんどん取り壊され新しい社会が建設されているのです。我が校においてもカルチェラタンをとりこわし新たなクラブハウスを建設することは歴史的必然であり大半の学生の望むところであります<sup>16)</sup>

このような考えに対して、俊の発言「古いものを壊すことは過去の記憶を捨てることと同じじゃないのか!?」「新しいものばかりにとびついて歴史をかえりみない君たちに未来などあるか!!」には、この映画にこめられたメッセージが強烈に表れている。すなわち、上述した発言者のような「古いものはすべて壊し、新しいものだけが素晴らしいと信じていた<sup>17)</sup>高度経済成長期の考えに対して、より現代的な視点から異議を唱えていると見ることができるだろう。その意味で、カルチェラタンはまさに「古いもの」の象徴であった。

このカルチェラタンを生徒たちが最終的にどのように守ろうとするのかという点が、本稿のもう一つの着目点である。カルチェラタン存続をめぐる政治的活動において転機となるのは、それまでそれらに関心のなかった、あるいは関わりがなかった生徒が、次第に活動に参加していく姿である。前述した集会の場面では、議論を行っていた生徒は主に男子生徒であり、女子生徒は講堂の後ろのほうで議論の様子を見ているか、集会にも参加していないかのどちらかであった<sup>18)</sup>。ところが、建替え推進派が優勢であることに悩む俊に対し、海がカルチェラタンの掃除を提案したことにより、女子生徒たちも協力しての大掃除が始まる。

それまでの男子生徒のみの活動に女子生徒が加わったことは、カルチェラタンにおける文化の寛容をもたらした。例えば、ガラクタの山となっていた哲学研究会の部室に、掃除後には花柄のカーテンが引かれていた場面は象徴的である。以上のような生徒たちの活動は、「古いもの」をただ墨守するのではなく、現状を見据えた上で従来とは異なる新しい側面を取り入れつつ、それを守って行く姿として捉え

ることができる。

## むすびにかえて

これまで見てきたような、映画『コクリコ坂から』における、学内の問題に関する高校生の一連の活動は、現代の視点から理想化された部分も多いながらも、現代の学校における生徒たちの政治的活動の可能性を提示してくれている。すなわち、政治的活動を「古いもの」としてまるごと捨て去るのではなく、学校の政治的中立性を担保した上で行なうという道である。

ただし、現代の学校において政治的活動が可能であるということと、それを生徒たちが実際に行なうこととの間には当然ながら距離がある。筆者の中学・高校時代を振り返ってみても、今や学校内の問題について自ら声をあげるといふ発想すらない生徒が大半なのではないかという気さえするのである。

映画のストーリーの後半では、取り壊しを強行しようとする学校側に対して、海と俊、生徒会長の三人が理事長に直訴し、掃除後のカルチェラタンの様子を実際に見てもらおうことになる。本稿の最後に、理事長がカルチェラタンを訪れる場面を見てみよう。

理事長「なかなか立派な建物ですな」  
校長「恐れ入ります…」  
理事長「君たちは何をしているのだね」  
天文部員「ハッ！」[帽子を脱ぐ]「太陽の黒点観測を十年続けています！」  
理事長「ほう、10年。で、何かわかったかね？」  
天文部員「太陽の寿命は長く、私たちの時間は短く、まだ何もわかりません！」  
理事長「うん。いさぎよくていい」  
[理事長、階段を上り、哲学研究会の小ちんまりとした部屋の前で足を止める]  
理事長「哲学か…君は新しい部屋がほしくないかね？」(中略)  
哲研部員「失礼ながら閣下は樽に住んだ哲人をご存じでしょうか!？」  
理事長「ディオゲネスか…」[豪快に笑う]「校長先生、いい生徒たちじゃありませんか」<sup>19)</sup>

このようなやり取りが行われた後、生徒たちは理

事長に向かって全員で『紺色のうねりに』を合唱する<sup>20)</sup>。合唱を聞いた理事長は「諸君、このカルチェラタンの値打ちが今こそわかった。教育者たるもの文化を守らずして何をかいわんやだ。私が責任を持って別の場所にクラブハウスを建てよう！」と発言し、これによりカルチェラタンの存続が決定する。もちろん、これは物語であり、かつ私立高校だからこそ可能になった結末であると言えるが、生徒たちの活動に対する理事長の寛容な姿勢が非常に印象的な場面である。

実際、1969年通達が出された後も、1960年代末から1970年代にかけて、全国の高校では主に頭髪や服装の自由化などをめざす政治的活動が行われていた。また、前述した下村も、当時の高校生の政治的活動における要求項目は、学内の問題に対する実に多様な要素を含んでいたことを明らかにしている<sup>21)</sup>。これらの学内問題にかんする要求は、党派性を帯びた政治的活動とは異なる性格を有しているが、当時の状況下では政治的活動そのものの禁止により、見過ごされてしまった事例も多い。

当時は押さえつけられてしまったこれらの活動を、いかに見直し、それらをいかに子どもたちに伝えることができるのか。子どもたちが声をあげた際に、どのような姿勢でそれらを受け止めることができるのか。すなわち、大人の側が「古いもの」にどのように向き合うかが、問われていると言えるだろう。本稿の検討をふまえて、今後の課題としては、1960年代から1970年代の高等学校における生徒の政治的活動について、さらに検討を深める場を持ちたいと考えている。

## 注

- 1) 例えば、小玉重夫「戦後教育学における子ども・青年把握を問い直す」(『生活指導研究』第15号、日本生活指導学会、1998年、3-19頁)、森田尚人・今井康雄・森田伸子編著『教育と政治—戦後教育史を読みなおす』(勤草書房、2003年)、広田照幸「コドモを市民に育てるには」(『アステイオン』第72号、2010年、84-99頁)など。
- 2) 広田照幸、前掲論文、87頁。
- 3) 「義務教育諸学校における教育の政治的中立の確保に関する臨時措置法」および「教育公務員特例法の一部を改正する法律」(1954年6月3日)のことを指す。これにより、教員を教唆・扇動して生徒に特定の政党を支持

- または反対する教育を行わせることの禁止、および教員による政治的行為の制限が定められた。教育二法についての近年の研究としては、森田尚人「旭丘中学事件の歴史的検証」(上)(下)、(『教育学論集』第50・51集、中央大学教育研究会、2008年3月・2009年3月、37-112頁・37-111頁)、藤田祐介・貝塚茂樹『教育における「政治的中立」の誕生「教育二法」成立過程の研究』(ミネルヴァ書房、2011年)が挙げられる。
- 4) 文部省初等中等教育局長通知「高校における政治的教養と政治的活動について」(1969年10月31日) 鈴木英一・平原春好編『資料教育基本法50年史』勤草書房、1998年、1035頁。
  - 5) ただし、旧教育基本法第八条第二項で定められた学校の政治的中立性は、もともとは学校での政治教育を促そうとする中で、それが党派活動を抑制する意図をもって規定されたものであった(小玉重夫「第十四条政治教育」浪本勝年・三上昭彦編著『「改正」教育基本法を考える』北樹出版、2007年、91頁)。だとすると、高校生の政治的活動についても党派に偏らないものは許容されることになるが、1969年通達ではそのような政治的活動そのものが「望ましくない」とされたのである。1969年通達と教育基本法における政治的中立性の異同については、山口恭平・降旗直子・児島博紀・稲井智義・古仲素子・宮地和樹・村松灯・古田雄一「カリキュラム・イノベーションにおける政治的シティズンシップ教育のための歴史・思想・実践的条件—イギリスにおける経験を参照枠として—」(『平成23年度学校教育高度化センタープロジェクト報告書』2012年、51-81頁)において詳しく言及している。本稿は、上記共同研究への参加と、大学院小玉ゼミでの討論から示唆を得ている。
  - 6) 例えば、小熊英二『1968<上> 若者たちの叛乱とその背景』(『1968<下> 叛乱の終焉とその遺産』(新曜社、2009年)、佐藤信『60年代のリアル』(ミネルヴァ書房、2011年)、下村哲夫『高校紛争 1969-1970 「闘争」の歴史と証言』(中央公論新社、2012年)など。
  - 7) 下村、前掲書、280頁。
  - 8) 広田、前掲論文、85-87頁。
  - 9) 本稿の執筆にあたっては、映画本編のほか、宮崎駿・丹羽圭子『脚本 コクリコ坂から』(角川書店、2011年)、アニメージュ編集部編『コクリコ坂から』第1-4巻(徳間書店、2011年)およびコクリコ坂公式HP <http://kokurikozaka.jp> (最終アクセス日:2012年5月6日)を参考にした。また、映画『コクリコ坂から』について述べた先行研究としては、宮台真司・宇野常寛『「父殺し(の不可能生)」から『父教し』へ—3.11後の世界とその意味』(『PLANETS SPECIAL 2011 夏休みの終わりに』第二惑星開発委員会、2011年)が挙げられる。
  - 10) 映画の中では特に言及はないが、フランス語で「海」を表す“la mer”からとったということが原作で描かれている(佐山哲郎原作・高橋千鶴作画『コクリコ坂から』講談社、1980年=佐山哲郎原作・高橋千鶴作画『コクリコ坂から』角川書店、2011年、35頁)。
  - 11) 例えば、俊たち新聞部が校門の前で号外を配っているシーン、また活動の展開に伴って「カルチェラタンに行こう!! 活況を呈する大掃除 動き出したOB諸氏」「女子生徒の過半数取り壊しに反対 逆転した支持率!!」「カルチェラタン取り壊しに全生徒の過半数が反対!! 情勢は大きく変化した」などの記事が次々と映し出されるシーンなどがある。
  - 12) アニメージュ編集部編『コクリコ坂から』第2巻、29-32頁。
  - 13) 『白い花の咲く頃』は、寺尾智沙作詞、田村しげる作曲。1950年に発表されたNHKラジオ歌謡の一曲である。これらの合唱は、戦後、とくに1960年代に全国的に流行したうたごえ運動を思わせる。
  - 14) 佐山・高橋、前掲書。
  - 15) 宮崎・丹羽、前掲書、7頁。
  - 16) アニメージュ編集部編『コクリコ坂から』第2巻、24-26頁。
  - 17) 映画『コクリコ坂から』公式HP「プロダクションノート」<http://kokurikozaka.jp/pnote.html> (最終アクセス日:2012年5月6日)。
  - 18) 設定によると、港南学園は2年前に男子部と女子部が統合された学校であった(宮崎・丹羽、前掲書、156頁)。
  - 19) アニメージュ編集部編『コクリコ坂から』第2巻、85-90頁。
  - 20) この曲は、宮沢賢治の詩「生徒諸君に寄せる」をもとに、宮崎駿・吾朗が作詞したものである。作曲は谷山浩子。また、映画中にはこの宮沢賢治の詩の一部を、現代詩研究会が朗読している場面がある。
  - 21) 下村、前掲書、86-87頁。下村は、高校紛争において生徒側から出された要求項目について、(1)生活指導、校則(生徒心得改訂や制服・頭髮自由化など)(2)教育制度(エリート教育反対、能力別コース廃止、自主講座の設定など)(3)学校運営、政策(学校運営への参加や職員会議の公開など)(4)政治課題(ベトナム戦争反対や安保反対など)の四つに分類している。実際の

活動の場面ではこれらは混然となっていたところも多分にあると考えられるが、これらの要求についてもき

ちんと区別した上で今一度見直す必要がある。